



TITLE:

平安朝の宴集における序と詩歌(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山本, 真由子

CITATION:

山本, 真由子. 平安朝の宴集における序と詩歌. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18712>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	山本 真由子
論文題目	平安朝の宴集における序と詩歌		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>I 序と詩歌・物語</p> <p>第一章 延喜七年大堰川行幸の詩歌と『菅家文草』—「秋水に泛かぶ」の表現をめぐって—</p> <p>延喜七年（九〇七）九月十日重陽後朝、宇多法皇の大堰川行幸に際して、「眺望九詠」の九つの題のもとに漢詩と、題を同じくして仮名序と和歌とが詠作された（以下、これらの作品を「行幸詩歌」と称する）。この行幸は、寛平元年（八八九）に始まり宇多天皇一代で終焉した重陽後朝の詩宴と一連のものであると位置づけられる。本章では行幸詩歌の表現について、それ以前の重陽後朝の詩宴で詠作された漢詩文との関わりを軸に考察する。</p> <p>特に、行幸の十年前に、菅原道真が重陽後朝の詩宴で詠作した詩序と詩の題「閑居秋水を楽しむ」と、行幸詩歌の第一の題「秋水に泛かぶ」とは、題に同じく「秋水」の語を有しており、両者は関わりがあると考えられる。「秋水」は『莊子』の用語である。道真の詩序と詩が、詩宴の場を上皇にふさわしい『莊子』の思想を具現化した場として描くことは、「秋水に泛かぶ」の題のもとに詠まれた行幸詩歌の表現に大きな影響を与えている。行幸詩歌と道真の詩には共に、仙界である天の河に往来した筏の説話（仙査説話）をふまえる表現が見られる。道真は、詩宴の場を『莊子』の思想の世界に結びつける媒として仙査説話を用いていると考えられる。この表現を、行幸詩歌は継承している。また、行幸和歌の「うき木」の語に注目すると、仙査説話は、法皇周辺で『莊子』の用語「虚舟」・「不繫之舟」と重ね合わせて受容され、表現に用いられていたと分かる。</p> <p>「秋水に泛かぶ」の題のもとに詠まれた和歌の表現の背景にも、白居易の詩に見られる「不繫之舟」の語を船遊びの実景と重ね合わせた表現が想定される。行幸の舟を木の葉に見立てる和歌の表現は、行幸の実景を詠むと同時に「不繫之舟」を表現しており、船遊びの場が『莊子』の思想の世界が具現化した場であると詠っているようである。</p> <p>「秋水に泛かぶ」の題のもとに詠まれた詩歌の表現は、行幸の主題のひとつが、『莊子』の思想の世界を、法皇にふさわしい世界として示すことにあったのではないかと思わせる。</p> <p>第二章 大江千里の和歌序と源氏物語胡蝶巻—初期和歌序の様相と物語文学への影響—</p> <p>本章では、和歌序の初期の様相と、その物語文学への影響を明らかにすることを目的として、大江千里の和歌序の表現の特徴と『源氏物語』における受容の可能性について検討する。</p>			

東京大学史料編纂所蔵『扶桑古文集』に収められる大江千里「三月三日、吏部王池亭会〈十四首／并序〉」（以下「池亭会序」と称する）は、現存する和歌序の中で、制作年代が最も遡る作品の一つとされる。作者の大江千里は、寛平六年（八九四）に、漢詩を題として和歌を詠んだ『千里集』を撰進したことで知られる。千里の作品が『源氏物語』に受容されていることは、『千里集』の一首が花宴巻に引かれることから窺われる。

池亭会序の表現の特徴としては、白居易の詩から学んだ語を用いる一方で漢語を日本における意味・用法で用いていること、表現の発想には和歌と共通する点が見られることが挙げられる。いわば和歌を漢文に翻案する、すなわち和歌を典故として漢文が書かれているのではないかと考えられる。このような表現は、和歌の表現や内容に沿う漢文で歌会の様子を記し、和歌に冠するに適した序を書こうという意図のもとに創造されたのではないかと考えられる。

物語文学への影響としては、池亭会序の前段の表現が『源氏物語』胡蝶巻の船樂の場面に、序の後段の表現が船樂に続く季の御読経の場面に、それぞれ近似していることが指摘できる。池亭会序は、『源氏物語』胡蝶巻冒頭の船樂および季の御読経の場面に主たる典故として用いられているのではないかと考えられる。

池亭会序は、その後の漢文体の和歌序の先駆けとなったばかりではなく、その和歌をふまえる漢文の表現に面白さを見出されて、仮名文の物語の創作に取り入れられたのではないだろうか。

Ⅱ 詩序と和歌序

第三章 源順の「閏三月詩序」について—詩序における源順の表現の特質—

村上朝の応和元年（九六一）閏三月に、大宰帥親王の邸宅で催された詩宴において、源順（九一一—九八三）が制作した詩序「後の三月、都督大王の華亭に陪して、同じく「今年又春有り」といふことを賦し、各一字を分かち、教に応ず」（以下「閏三月詩序」と称する）が、『本朝文粹』（巻八）に伝存している。この詩序は、『和漢朗詠集』において「閏三月」の部立が構成される契機となったと考えられ、源順の文学史上に果たした役割を検討するうえで重要な作品である。本章では、「閏三月詩序」の表現および、句題「今年又春有り」について、先行する漢詩文のほか、和歌との関わりを具体的に検討することで、源順の詩序の表現の特質を明らかにすることを試みる。

句題「今年又春有り」は、白居易によって見出された、三月晦日を春の最後の日として春を惜しむ「三月尽」という詩の題材から発想されている。さらに、閏月を詠む白居易の詩、その詩をふまえた菅原道真の閏正月の詩序にある「一歳餘分之春」の表現などを典故として案出されたと考えられる。源順の「閏三月詩序」の表現は、句題「今年又春有り」の発想の根柢に「三月尽」の詩歌群と道真の表現があることをふまえ、道真や橘在列などの先行する作品が作り上げた「三月尽」の表現を巧みに取り込んで創造されている。このように創造された源順の表現が評価された結果、『和漢朗詠集』に於いては「三月尽」の次に、「閏三月」の部立が構成されたのだと考えられる。

さらに、源順の詩序の表現と和歌の表現との関わりを観察すると、和歌と共通する発想に基づき、詩宴の参加者に共感される詩序の表現を追究していることが窺える。

「閏三月詩序」の表現は、詩宴の参加者に共有されていたであろう文学に関する知識と、詩宴固有の状況とを巧みに結び合わせて書かれている。源順の詩序の表現の特質のひとつは、このように詩宴固有の状況に即応した、ただ一度限りの表現を目指していることであると考えられる。このような特質を備えた源順の詩序は、詩宴の参加者に文学作品の創造過程に参加する意義を知らしめ、個々の詩宴の価値を実感させたであろう。

第四章 『順集』の「うたの序」—源順における和歌序と詩序—

本章では、源順の仮名文の和歌序「うたの序」について、詩序からの様式・文体の摂取を指摘し、その特徴を明らかにする。

源順の家集『順集』には、詞書の中に「うたの序」という言葉を用いる作品が2例ある（新編私家集大成・順Ⅱ）。そのうち、冒頭に「西宮に小さき紅梅を植ゑさせ給ひたりけるを、初めて花咲きたる年、よろこびて、男ども、おのおの文字一つを探りてよむうたの序。探りて「こ」文字をたまはれり」とある作品には、二首の歌「白浪の知らぬ身なれど大淀の仰せごとをばいかが背かむ」、「梅津川この暮よりぞ流れてのうれしき瀬々は見えむ水底」が並列されている。この作品には、「白浪の」の歌が、冒頭で述べられる条件—探り得た「こ」の文字を用いて紅梅を詠む—に合わないという問題がある。さらに、『順集』の古写本の本文の書き方を見ると、この作品における和歌は「梅津川」の歌一首なのではないかと思われる。『順集』にもう一例見られる「うたの序」については、小沢正夫氏『古代歌学の形成』（昭和三十八年）に、中国文学の「序」というジャンルに倣って書かれ、漢文の駢儷文に学び対句表現が用いられていると指摘されている。

源順の書いた詩序は十七篇伝存し、そのうち七篇が末尾に謙遜の辞を述べて結ばれている。「白浪の」の歌は、詠歌の心得はないけれども、という謙遜の表現と考えられる。この歌は、詩序の謙遜の辞に倣った、「うたの序」の末尾と見るのが適当であると考えられる。また、「うたの序」の構成は、源順の書いた詩序の多くに共通する構成と一致する。さらに「うたの序」は、「標題」、「句切を示す助字」に倣った語句、文体も、その多くを詩序に倣っている。

源順には、『順集』に見られる二例の他にも、仮名文の和歌序の佚文がある。この頃、河原院に住した安法法師を中心に交友した歌人により、仮名文の和歌序が数多く作られたようである。源順は、和歌序にふさわしい文として仮名文を選択し、自らの漢文作品である詩序の様式・文体に倣って和歌序を書いたと考えられる。

Ⅲ 詩序の展開

第五章 北陸豈に亦た詩の国ならむや—源順を送別する宴の詩序と詩歌—

本章では、『和漢朗詠集』に摘句された詩序の一節について、典故との関わりを再考し、宴集の実態を検討することにより、その表現がなされた意図と宴の場における解釈を明らかにすることを試みる。

天元三年（九八〇）正月、右衛門佐藤原誠信は、能登守として赴任する源順を送別する宴を催した。その宴で慶滋保胤が作った詩序「春日、右監門藤將軍の亭に於いて、能州源刺史の任に赴くに餞し、酔を勧め別れを惜しむ」（『本朝文粹』巻九）は、「三百盃と雖も強ちに辞すること莫かれ、辺土は是れ酔郷ならざらむ、此の一兩句は重ねて詠ずべし、北陸豈に亦た詩の国ならむや」の一節が『和漢朗詠集』「刺史」に摘句されている。

「詩国」の典故とされる白居易の「殷堯藩侍御が江南を憶ふ詩三十首を見るに、詩中多く蘇杭を叙せり。余嘗て二郡を典る。因りて継いで之に和す」詩は、その頸聯「境は吟詠を牽きて真に詩の国なり、興は笙歌に入りて好き酔郷なり」に「詩国」「酔郷」の対が見られる。保胤の表現については、長徳二年（九九六）に作られた大江匡衡「越州刺史に任に赴くに餞す」詩が参考になる。「越州（越前）」は、白居易の詩友元稹が赴任し、隣の杭州刺史であった白居易と詩の贈答を行った「越州」と地名が一致する。そのため、匡衡は、白居易が杭州を追想する詩の言葉「詩国」を用いている。これと近似する発想で、保胤は、「北陸」と白詩の「江南」とが上下を逆にすると対をなすことから、白詩が描く世界を反転させるという作品を構想し、白詩では「江南」の地が「詩国」であると詠うことに対比させて、「北陸」は「詩国」ではないということ考えられる。

源順を送別する宴は、詩序に「文道を重んずればなり」という主題のもとに、日頃から藤原為光・誠信父子の家に入出入りし漢詩文や和歌を詠作をする親しい関係にあった人々が集って催されたと考えられる。保胤の表現は、白詩の「江南」と「北陸」とを対比することに加え、餞宴の場と「北陸」とを対比している。保胤の意図は、「北陸」と対比することによって、「江南」と文道を重んずる餞宴の場とを重ね合わせて表現することだったのではないか。「北陸豈に亦た詩の国ならむや」の表現は、源順を送別する宴の場が「江南」のように「詩の国」であると賛美した表現であり、そのように宴の場では理解、享受されたとと思われる。

第六章 源順と紀齊名の詩序表現について―具平親王詩宴の「望月遠情多詩序」を中心に―

本章では、具平親王の元で作られた二篇の詩序と漢詩の表現を比較し、源順の詩序の後世への影響を考える。

一条朝前半に活躍した紀齊名（九五七―九九九）が編纂した『扶桑集』には、源順の作品、とりわけ「詩序」が多く採録されていたといわれている。順は、橘正通を介して齊名の師に当たる（『江談抄』巻五）。順と齊名は共に、具平親王（九六四―一〇〇九）が主宰した詩宴で詩序を書いている。その齊名の詩序「仲秋、中書大王の書閣に陪して、同じく「月を望めば遠情多し」といふことを賦し、教に応ず」（『本朝文粹』巻八。以下「望月遠情多詩序」と称する）をとりあげ、表現に見られる順の影響を検討する。

「望月遠情多詩序」の具平親王への讃辞の表現には、順の詩序を摂取した形跡が著しい。まず、鮮烈な印象を残していたと思われる順の表現と同じ典故、『漢書』「景十三王伝」を利用している。さらに、具平親王の元で順が作った「七月三日、第七親

王の読書閣に陪して、同じく「弓勢は月の初三」といふことを賦す、教に応ず」（『本朝文粹』巻八。以下「弓勢月初三詩序」と称する）が親王を曹植に擬えていることをふまえて、曹植の名を賛辞に用いている。つまり、順の詩序そのものを典故としていると考えられる。

順の「弓勢月初三詩序」については、謝荘「月賦」（『文選』巻十三）の構成と表現とをふまえていることが指摘されている（後藤昭雄氏）。「望月遠情多詩序」には、順がふまえる「月賦」の表現も用いられている。斉名は、順の作品を通して重層的に典故を利用して、親王を再び曹植に、自分たちを建安の文人に擬えて、詩宴を称えているのだろう。

また、「望月遠情多詩序」第三段の表現からは、斉名が順の詩序から、ただ一度限りの表現を目指す姿勢を学んでいることが窺える。斉名における順の詩序とは、典故や表現技法を学ぶという外形的な模倣の対象というにとどまらず、発想の根柢に位置づけられる作品であったと考えられる。

（論文審査の結果の要旨）

平安時代の日本文学が中国文学の大きな影響の下にあったことは言うまでもない。『古今集』『源氏物語』をはじめとする和歌、物語においても、中国文学の表現、発想がさまざまな形で受容された。古注釈の時代から今日に至るまで、その受容の実態を明らかにする典拠研究は、数多くの秀れた業績を積み重ねてきた。

しかし、和歌や物語が中国文学を受容するための重要な条件として、日本における漢文学の隆盛があったことを忘れることはできない。『古今集』や『源氏物語』と並行して、『菅家文草』や『本朝文粹』などに収められた平安朝第一級の知識人による漢詩文があった。中国文学をほとんど忠実に模倣するものであり、また当時において最も尊重すべき文学と考えられていたその漢文学を介してこそ、中国文学の影響は和歌や物語の世界のすみずみまで浸透していったと考えられるべきであろう。

そのような観点に立って、本論文は、平安朝文学における漢文学、すなわち和歌や物語の上位にあって、結果的に中国文学の影響を和歌や物語の世界に伝える重要な役割を果たすことになった漢文学の研究を志すものである。平安漢文学史の研究は、研究者の数は少ないながらも継続してあった。しかし、それを和歌や物語における中国文学受容の問題と密接に関連づけて考察しようとする態度がいつもあったわけではない。本論文の独自性、独創性は、その点にこそある。

本論文は、平安朝漢文学の中でも、特に公私の宴集における漢文序と和歌序とを考察する。たとえばその第二章は、大江千里「三月三日、吏部王池亭会序」が、白居易の表現などを学びとった漢文でありながら、一方でその宴会で詠われた和歌の表現や内容を取り込んだものであること、そして、それが『源氏物語』胡蝶巻の船楽の段、および季の御読経の場面の典拠となったことを論じる。典拠とまで言えるかどうか、なお留保が必要であろう。しかし、千里のその漢文が和歌や和文、とりわけ胡蝶巻の表現に親しいことは間違いのないところである。日本漢文学が、中国詩文と和歌和文の双方の特色を兼ね備え、二つの表現世界の間の架橋となる重要な存在であったことが、この指摘によって十分に明らかにされた。

第三章と第四章は、日本漢詩人の代表格である源順の詩序と和歌序とを取り上げる。第三章は、白居易の三月尽日詩の影響を受けて日本の漢詩と和歌に広まった三月晦日の惜春の主題がさらに閏三月の題に展開するきっかけを、源順の詩序が作ったことを説いて興味深い。また第四章は、仮名の序文と紅梅を詠む歌二首として理解されてきた順の作品について、実は一首めの「白浪の知らぬ身なれど大淀の仰せごとをばいかが背かむ」が、五七五七七の形ながら、実は歌ではなく、序文の末尾であったことを論証する。一つには「白浪の」以下を歌としてではなく、序文の末尾として続けて記す古写本が存在すること、また平安朝の漢文序は謙遜の辞によって結ばれるのが常なので「知らぬ身なれど」が序文の結びにふさわしいこと、さらには、この仮名序が対句を用い平仄の決まりを守る漢文序の体裁を学んでおり、「白浪の」以下もその形の中に包摂されると考えられること、その他さまざまな観

点からの考察を尽くす。その間然することのない論証によって明らかになされたのは、「白浪の」以下が序文の末尾であったという一事実にはとどまらない。仮名序が漢文序の体裁を忠実に襲おうとすること、ひいては平安時代の和文の文体が漢文体の強い影響の下に成立したことが、一つの具体例によって確実に証明されたのである。一斑を挙げて全豹を推知せしめる卓越した論考であった。

本論文は、読解の難しい平安漢詩文を、その典拠を明らかにしつつ丁寧に読み進めようとするものである。その態度は高く評価できる。しかし反面、論述が単調になり、論証の筋がやや見えにくくなる傾向が一部にあった。研究対象をより広くすることと合わせて、その克服を今後の課題としてさらに精進を重ねることを求めたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十七年一月二十六日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。